

ノロウィルスの季節が近づいてきました

涼しくなってきたこの季節。そろそろ細菌性食中毒も落ち着いてくる季節。

しかし、この季節を境に急激に発生件数が増加する食中毒があります。そう、皆様もご存知の『ノロウィルス』です。



そこで今回は、ノロウィルスの2次感染を防ぐ為の消毒方法についてご説明します。

・調理器具等の消毒

洗剤により十分に洗浄した後、次亜塩素酸ナトリウム（200ppm）をペーパータオル等で浸すように拭き取る。

※加熱できる調理器具に関しては85℃以上の熱湯で1分間以上加熱するのが有効です。



・トイレ・浴槽の消毒

次亜塩素酸ナトリウム（300ppm以上）をペーパータオル等で浸すように拭き取る。

・嘔吐物・ふん便による汚染場所の消毒

嘔吐物はウィルスが飛び散らないようにペーパータオル等で静かに拭き取り、ビニール袋に密閉して廃棄する。

※その際には、ビニール袋に廃棄物が十分に浸る量の次亜塩素酸ナトリウム（1000ppm）を入れる事が望ましいです。

床等の汚染場所は次亜塩素酸ナトリウム（200ppm）をペーパータオル等で浸すように覆い、その後水拭きします。



汚染場所の消毒作業を行う時は、エプロン、マスク、ゴム手袋を着用の上、十分に換気をしながら行いましょう。



ゴキブリ小話③ ～涼しい季節のゴキブリ～



暑かった夏も過ぎ去り、秋、冬と徐々に寒い季節へと移行していきます。

「夏の害虫」というイメージの強いゴキブリも寒い時期にはいなくなると思われがちですが、飲食店などで多く見られるチャバネゴキブリは「いなくなる」のではなく、「暖かい場所に身を隠している」だけなのです。

チャバネゴキブリは一般的に暖かい場所を好み、20℃～31℃前後くらいの温度の時に最も活動的になるといわれています。その反面、15℃以下では殆ど活動せず、繁殖率・寿命共に極端に低くなります。

しかし、飲食店では厨房機器のモータ部など冬でも生息に適した暖かい場所が数多く存在します。



最近では空調設備や暖房設備なども整っているお店が多く、冬期でも最低限の温度を確保できる為、チャバネゴキブリの越冬が容易になっております。

冬でも快適に過ごせる厨房環境は、ゴキブリにとっても快適という事なのです。

地球の環境衛生を創造する
株式会社 FCC
fine, comfortable & creative

株式会社 FCC

住所：神奈川県藤沢市辻堂元町4-3-32

電話 0466-31-3164

FAX 0466-31-3174

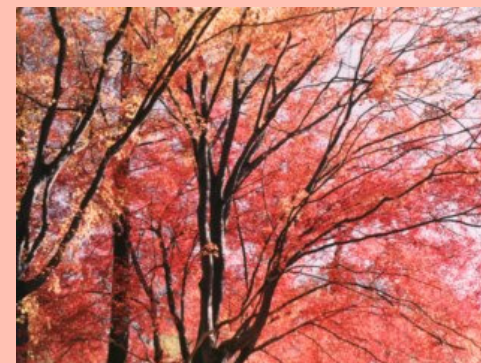
URL <http://www.fccsystem.co.jp>

E-mail info@fccsystem.co.jp

FCC News

2008年10月号

NO. 0056



目次

本紙

秋口に発生するムカデ対策

外来種の脅威

ノロウィルスの季節が近づいてきました

ゴキブリ小話③

別紙

季節のムシ暦

環境コラム

秋口に発生するムカデ対策

ムカデは30℃を越すような真夏日には、地中に潜んだりしている為、見かける事も少なくなります。気温が落ち着いてきた今頃は交尾の相手を探しに、徘徊します。

全てのムカデは顎肢に毒腺を持ち、これにより昆虫を捕食します。ムカデに咬まれてしまいますと、激しい痛みの後、患部が赤く腫れ、時として発熱を伴う事があります。



万一、咬まれてしまった場合は素早く顎を引き離し、水道の流水で患部を浸しながら、患部から毒を搾り出しましょう。その後、医師の診断を受ける事をお勧めします。

☆環境を整えましょう☆

ムカデは土壌環境に生息し、主に落ち葉の下など人目につかないところを好みます。

ムカデを頻繁に見かける建物は、共通して周囲に雑草が生い茂っていたり、ブロックが無造作に放置されていたり、落ち葉が散乱しているなど、手入れが行き届いてない事が多いです。



建物周囲の雑草を除去し、落ち葉を掃き、ブロックなど不必要なものを撤去しましょう。その際には、物陰に隠れているムカデに咬まれぬよう注意して行いましょう。

建物の周囲の清掃の徹底が、何よりの防除になりますので、こまめに除草や掃き掃除をしましょう。

★駆除しましょう★

環境が整ったら、現在生息しているムカデを駆除しましょう。市販の粉剤（殺虫剤）を壁に沿うように設置していきます。粉剤設置の際には、雨など、水によって流れてしまいますので、注意が必要です。

その後、玄関やベランダ等、侵入が考えられる場所やよく見掛ける場所にも粉剤をしかけていきましょう。



外来種の脅威

そもそも外来種とは何でしょう？

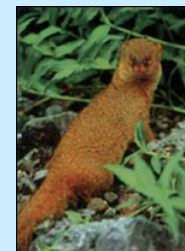
外来種とは、他の地域から人為的に持ち込まれた生物の事を指して言います。外来種に対して従来からその地域で棲息、生育しているものを在来種と言います。

外来種の中でも、移動先で分布の拡大をした時に在来種の絶滅の危険がある恐れがあるなど、特に生態系へ多大な影響を及ぼす種や人間の生活に多大な影響を及ぼす種を、侵略的外来種と言います。



例えば、ルーフィッシングを目的に全国の河川や湖沼に放たれた『ブラックバス』が在来種を圧迫しています。

また、ハブ退治の為に沖縄に放たれた『マングース』がヤンバルクイナやアマミノクロウサギなど希少な小動物を絶滅の危機に追い込むなど各地で猛威を振るっています。



そんな侵略的外来種の中に『アメリカカンザイシロアリ』と言う害虫がいます。名前の通りシロアリの一種です。

名前の通り乾材（乾燥した木）を好むシロアリです。76年に東京で発見されてから全国数十箇所で報告例があります。



従来日本に棲息分布する『イエシロアリ』や『ヤマトシロアリ』は湿気を好む為、進入は主に床下から進入してきます。

その為、湿気対策をして、床下に薬剤処理をすれば一定の予防効果が得られます。

しかし、この『アメリカカンザイシロアリ』は湿気がなくても問題ない為、羽ありが舞い降りた木材を加害します。



時に窓から侵入し、またある時には屋根裏から進入してくる為、進入を防ぐ事は事実上不可能とされています。その上、完全な駆除方法が見つかっていないのが現状です。

建物に棲み付いたとしても被害の進行が遅く、人前には出てこない為、気付いた時には建物の上から下まであちらこちらに・・・、何てことも。

探す手がかりは、『糞』です。大きさは1mm程度で、黒色や茶色の顆粒状の粒で筋が入っているのが特徴です。また、木に開けた小さな穴から排出する為、積もっている事が多いです。



繁殖する前に早期駆除。その為に普段からの注意が必要なのです。

ダニと病氣の話

夏、秋の季節には、登山、ハイキング、それに茸狩りと山野に親しむことがすくなくない。

そんな楽しい思いをした後、身体が「かゆい」、皮膚に虫に刺された跡があるなど異常を感じることもある。

こんな時、一般的には、皮膚科を訪れて「虫咬症」と診断されることが多い。これは、昆虫類やダニ類による刺蟻、吸血および皮膚内寄生などによる直接的な加害による皮膚炎を云う。

この主要な原因虫をあげると次のような種類がある。それは、アリ、ハチ、ミツバチ、クモ、ダニ、蚊、ノミ、ナンキンムシ、ブユおよびアブなどである。

野外活動や作業に従事した人達が、虫咬症で受診した際の原因虫と症状を紹介すると表①に要約した通りである。

問題なのは、表中のその他や不明の139例で、その多くが「ダニ」が疑われていることである。これは、全患者の約36%を占めている。

ダニは、室内塵中にも存在し、「小児ぜん息」のアレルゲンとなることとが、よく知られている。ダニが関与する病氣には、主としてウイルス性疾患とリケツチア疾患がある。

後者は、発疹チフス、ロッキー山熱、Q熱およびツツガムシ病などがよく知られている。なかでも、「ツツガムシ病」は、一般によく知られたダニ由来の病氣である。

では、「ツツガムシ病」とはどんな病氣なのか、すこし詳しく紹介する。

ツツガムシ病（恙虫病）は、古くから北日本の秋田、山形、新潟地方にあった死亡率の高い風土病であった。

この病原は、リケツチアと云う病原微生物で、ツツガムシと云う「ダニ」アカツツガムシの体内で生育し、人に感染する。

戦後になって、富士山麓で北日本の三県にみられなかった、新しい型のツツガムシ病が発生し、たちまち全国に広まった。

ツツガムシ病は、リケツチアが体内に入ると7日から14日の潜伏期を経て高熱を発生し、これが1〜2週間持続する。

この間に、この病氣の特徴である「刺し口」が認められる。診断がついた場合、治療はテトラサイクリン系抗生物質を投与するのが最も効果的である。

問題のツツガムシは、日本で100種を越すが、病原体を保有するのは、アカツツガムシ、タテツツガムシ、フトゲツツガムシ、トサツツガムシおよびカワムラツツガムシなどである。

また、ツツガムシの主要な寄主は、ハタネズミ、アカネズミ、ヒメネズミおよびドブネズミなどである。したがって、ネズミ退治が、大切である。

ダニは、人にとって油断の出来ない虫だ。

表① 総合病院に受診した虫咬症患者における原因虫とその症状

原因虫	患者数	主な症状			
		浮腫	じんましん	呼吸障害	その他(※1)
アリ	210	114	72	10	14
ハチ	14	10	1	1	2
ミツバチ	9	6	2	0	1
クモ	17	11	3	0	3
その他(※2)	46	27	15	0	4
不明	93	60	26	3	4
合計	389	228	119	14	28

備考: ※1 はき気、嘔吐など
※2 蚊、ダニ、ノミなど



ツツガムシの刺し口

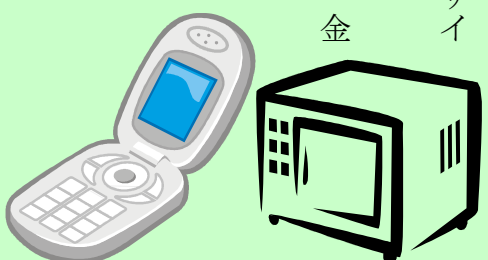
環境コラム 〈小型家電のリサイクル〉

皆様はレアメタルという言葉を目にしたことがありますでしょうか？恐らく、リサイクルに関心のある方は、一度は耳にしたことがあると思います。

レア（rare：希少な）メタル（metal：金属）という名前が示すように、金や銀などの希少な金属の事を指します。

今、小型家電のリサイクル状況の悪さにより、小型家電に使用されているレアメタルの回収率が悪化の一途を辿っています。

その際たるものが、『携帯電話』の回収なのです。2006年には、5000万台の出荷に対して、回収は600万台と、回収できた携帯電話は全体の12%しかありませんでした。



携帯電話の微細部分に材料として細やかな加工が可能なプラチナやパラジウムなどが、充電器の接続部分などには金や銀などが使用されています。

特に、金は良質な金鉱石1万tに対して50g程度しか取れないのに対して、携帯電話を1万台回収すると200〜300g程が再利用可能になります。

レアメタルは電池や液晶画面、半導体などに使用されており、先端技術産業に不可欠で、世界的に価格が高騰している為、リサイクルが不可欠になっていきます。



では、何故これほど回収率が悪化したのでしょうか？

ある調査によりますと、回収に応じない理由として「カメラとして使用したいから」「電話帳として」「データの保存」「個人情報の流出が怖い」などが上位を占めました。

通話機能以外の充実した機能が、回収率が悪くなった原因に挙げられています。

「携帯電話1台に含まれるレアメタルの量の説明や、個人情報流出の防止策を購入者に義務付ける事により、リサイクルへの理解を求めめるなど対策を模索しています。



2009年度には全国数箇所にモデル地区を設定し、1億2300万円の予算を投じて、小型家電をより多く回収できる方法を探る予定だそうです。

レアメタルの殆どは今のままのペースで採掘を続けると、新たな資源を発見しない限りは100年以内に枯渇するといわれています。

リサイクル事業などの環境問題は、国で対策する必要は勿論ありますが、皆様一人一人が現状を理解し、自ら進んで取り組んでいく努力が最も必要なのではないでしょうか？

